

高品質生産を目指した水稻良食味品種「どんとこい」の移植時期及び刈取時期の設定						
<p>[要約]</p> <p>水稻良食味品種「どんとこい」の高品質生産のための移植時期は、出穂後30日間の平均気温が26.0℃未満になる時期を目安として水稻適作期生育予測システムにより求める。また刈取時期は出穂後の積算気温が960～1,030℃になる時期である。</p>						
総合農林試験場作物部栽培技術科	専門	栽培	対象	稲類	分類	普及
資料名 平成12年度九州地域試験研究成績・計画概要集（水田作）						

[背景・ねらい]

県内の水稻早生品種の主要産地では出穂期に高温に遭遇すると品質が低下し問題となることがある。特に「どんとこい」はその傾向が強い。そのため、出穂時期が高温に当たらないように移植時期を設定する必要がある。そこで移植時期別の生育特性を明らかにし、高温登熟による品質低下を防ぐ出穂期の早限並びに低温による登熟不良を防ぐ晩限を解明し、移植時期を明らかにする。

また「どんとこい」の刈取時期は明確な判断基準がないので、刈取時期別の収量・品質を検討し刈取時期を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 移植時期別の検査等級は6月6半旬以降で高い傾向を示す（図1）。
2. 品質低下の主な要因は年次により異なるが、背白粒の発生が多くなると検査等級が低下する傾向がみられる（図2、図3）。
3. 出穂後30日間の平均気温が26.0℃を超えると背白粒が多発する傾向がみられる（図4）。
4. 移植時期が遅くなっても、充実不足による玄米品質の低下はみられず、登熟期間の気温の低下により登熟不良が生じるとは限らない（図5）。
5. 刈取時期別の検査等級は出穂後の積算気温が760～1,030℃で高く、このときの黄化籾割合は10～85%である（図6、図7）。
6. 薄茶米の発生は出穂後の積算気温1,200℃を超えると急激に増加する（図8）。
7. 玄米収量は出穂後の積算気温960℃以上になると最高収量の90%以上で推移し、このときの黄化籾割合は60%である（図9、図10、図7）。
8. 以上より、どんとこいの出穂時期は、高温登熟による背白粒の発生を避けるため、出穂後30日間の平均気温が26.0℃を下回る時期とする。
また刈取時期は出穂後の積算気温が960～1,030℃、黄化籾割合は60～80%である

[成果の活用面・留意点]

1. 成果を水稻適作期生育予測システムに組み込みシステムの充実を図る。
2. 県の栽培指針の基礎資料として活用される。

〔具体的データ〕

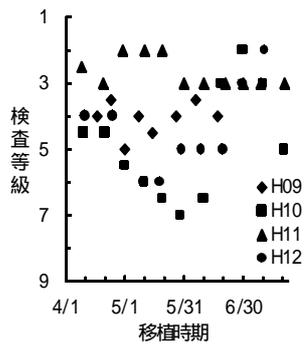


図1 移植時期と検査等級

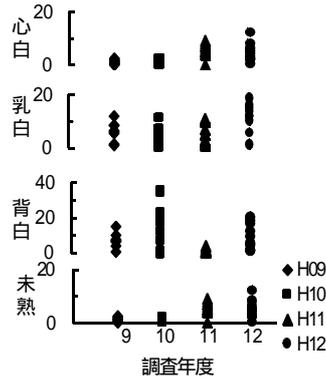


図2 調査年度と心白、乳白、背白、未熟

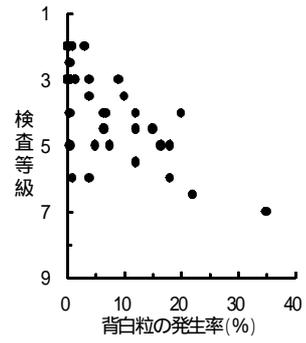


図3 背白粒の発生率と検査等級

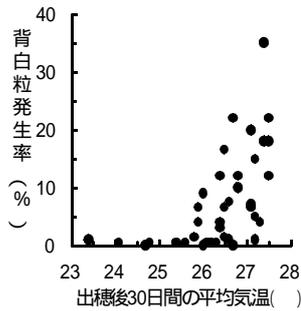


図4 出穂後30日間の平均気温と背白粒の発生率

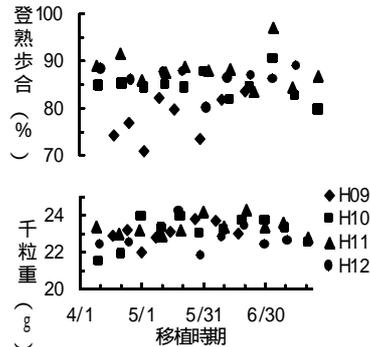


図5 移植時期と登熟歩合、千粒重

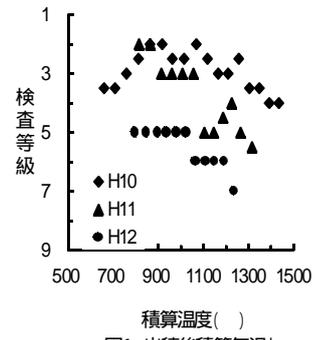


図6 出穂後積算気温と検査等級

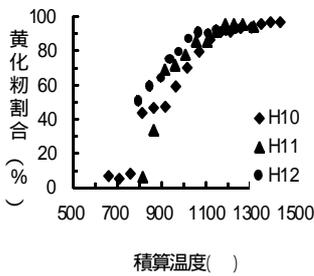


図7 出穂後積算気温と黄化割合

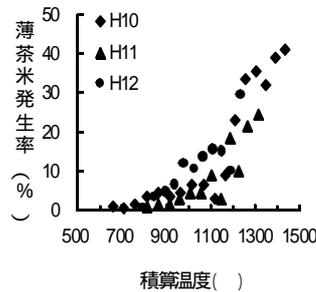


図8 出穂後積算気温と薄茶米の発生

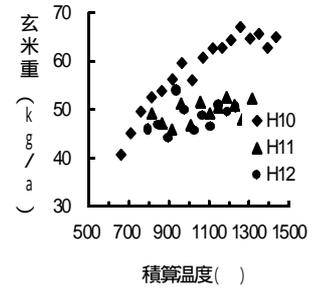


図9 出穂後積算気温と玄米重

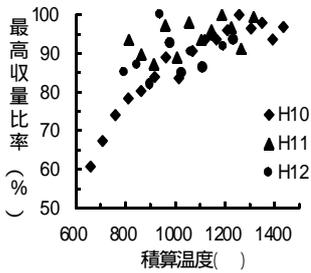


図10 出穂後積算気温と最高収量比率

研究課題名 : 良食味安定生産技術確立試験
 予算区分 : 県単
 研究期間 : 平成12年度(平成9~12年)
 研究担当者名: 大脇淳一、井出宏和、前田英俊、寺井利久
 既発表論文等: なし